

新潟県立こども自然王国

訪問調査日 平成 30 年 10 月 27 日(土)

ヒアリング対象者 新潟県立こども自然王国 館長 中村 和成

副館長 梅田 ひろみ

訪問調査者 岩田、坂井、野澤

I. 概要

1. 児童館等の概要について

(1) 施設規模

大型児童館 B 型（宿泊型）。

児童福祉法第 40 条に基づく児童厚生施設として新潟県が設置した施設である。

豊かな自然環境に恵まれた一定の地域内に設置される施設で、児童が宿泊をしながら自然を生かした遊びを通じて協調性・創造性・忍耐力などを高めることを目的としている。

延べ床面積：4,008.15m²（児童厚生施設）



主な保有施設・設備：

宿泊棟（2 階建）、研修棟（一部 2 階建て）、多目的ホール、屋根付き広場、体験工房、遊具広場、キャンプ場、野外炊事施設、自然観察路、野外バーベキュー広場、河川公園



多目的ホール



屋根付き広場



体験工房



遊具広場



キャンプ場



屋外バーベキュー場



河川公園

写真は新潟県立こども自然王国 HP より転載

<http://www.garuru-kururu.jp/facility/>



A エリアは児童館の中心となる本館があり、雨天時にも雨に濡れずに移動したり遊んだりできる空間の「屋根付き広場」がある。この広場を中心として「多目的ホール」、「研修棟」「本館」、「別館」等が建てられ天候に関わらず自由に行き来することができる施設構成である。また、屋根付き広場の2階レベルにも本館側と多目的ホール側から渡る歩道橋がかけられ、広場空間から地上階の車道を渡ることなく屋外のBエリアへと向かうことができる。さらに、屋根付き広場を囲む建物と渡り廊下の動線は循環構造となっており、悪天候の時は雨に濡れずに屋根付き広場を中心に建てられた建物内外を使って自由に体を動かせるレイアウトとなっている。

(2) 運営組織 株式会社生態計画研究所（指定管理者、東京都）

(3) 開館年月 1995年（平成7年）7月29日

(4) 職員体制 常勤15名、非常勤18名

(5) 年間運営費 74,324千円

(6) 年間利用者数と、その内訳（乳幼児・保護者、小学生、中学生、高校生、その他）

97,462人（平成29年度）年齢別の集計は実施していない。

(7) 年間活動計画・報告等

① 児童館の運営方針

自然環境や自然素材を最大限に活用し、子ども主体の体験型プログラムを提供し健全育成に努める。

② 1年間の活動計画

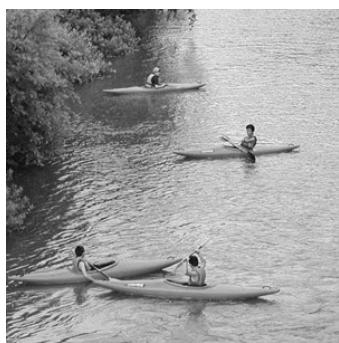
平成30年度に実施した主な活動は以下の通りである。

春…野外ラリー、春の恵みでピザづくり、GW あそびフェスタ、田植えどろんこ体験

夏…ホテル観察会、バードウォッチング、家族ではじめてキャンプ、ガルルキャンプ、こ

ども自然王国、じよんのび村盆踊り大会、風車アート、ジュニアリーダー交流キャンプ

秋…親子トンボ取り大会、カヌーまつり、稲刈り体験、秋の児童館まつり



夏季：カヌー



冬季：スキー

写真は新潟県立こども自然王国 HP より転載

<http://www.garuru-kururu.jp/facility/>

(8) 自治体における児童館の位置づけ（児童館設置数、子ども育成計画等の内容、他）

昭和60年（1985年）に実施された国勢調査では、旧高柳町の人口減少率が新潟県内第1位となった。加速度的に人口減少と少子高齢化が進行する中、平成3年に「地域を自分たち住民の力で活性化していこう」という動きが町内で生まれ、検討委員会「ふるさと開発協議会」を発足した。まずは観光・交流人口拡大を目指す目的で「じよんのび村」を開設し、約10haの土地を利用した温泉飲食宿泊施設として、第3セクター方式で運営を始めた。

じよんのび村開設に続き、子どもたちから大人まで交流できる施設を求める声が多数上がったことから、新潟県立こども自然王国設立の機運が高まった。「高柳町（当時）の地の利を生かした体験活動を子どもたちに提供したい」とのことで野外体験に重点を置いたB型児童館の設立に至った。

新潟県立こども自然王国開業と時を同じくして、地域と地域外の交流人口が増加した。年間およそ25,000人程度だったのが、最盛期300,000人、近年では震災（新潟県中越地震、新潟県中越沖地震）の影響もあり220,000～230,000人ほどで推移している。

2. 周辺環境について

(1) 地域の状況（産業、地域特性、交通事情など）

・地勢

こども自然王国があるのは新潟県の南西部、柏崎市南部の山間部の、旧高柳町地域である。高柳町は2005年（平成17年）、柏崎市に編入した。西に位置する黒姫山と、東に連なる高耕地山・薬師山・天王山からの支流を集めて、ほぼ中央を鯖石川が南北に貫流している。黒姫山（標高891m）は気軽にハイキング等が行えることから、柏崎市内、隣接自治体を中心に観光客を集めている。十日町市東頸城丘陵から日本海に向けて注ぐ鯖石川は古くから農業用水として利用されてきたほか、カヌー等のウォータースポーツ・レジャーも行われている。鯖石川沿いの小規模な平坦地と山腹の比較的平らな山間には19の集落が点在している。

・気候

夏は晴天が多く、湿潤な気候である。山に囲まれているため、日本海に低気圧が発達するとフェーン現象が発生する。冬は日本海から吹き抜ける季節風の影響で曇天が多く、山間部を中心に多くの降雪量を記録する。平均最大積雪深は155cmである。

・交通事情

児童館に至るまでの道路（国道252、253号線）は、トンネルが2か所開通している等、よく整備されている。かつては交通の便が悪く、他地域との経済交流はほとんどなかった。現在は魚沼等の地域とも交流が生まれ、経済協力も盛んになっている。

(2) 児童館と地域住民や地域組織とのかかわり

自然体験活動の運営・実施は、地域の支えがなければ難しい。そのため、地域住民や地域組織との連携は密接に取るようにしている。例えば、鯖石川で何かアクティビティを実施する際は、鯖石川ダム管理所に協力を要請する等している。

学校規模の利用者数は年々増加傾向にあり、沢登りやカヌーといった野外における自然体験活動が人気である。蛍の季節には夜の観察会を実施しているが、これには地元含め一般の参加者も多数参加しており、一つの地域交流の場となっている。毎年冬に開催される地元の祭り「高柳雪まつり（YOU・悠・遊）」には、職員全員で参加している。「大型児童館」であるが地元密着型の活動を大事にしたいと考えている。

(3) 子どもの育成環境

過疎化や少子化の進行に伴い、子どもたちが地域の大人と交流する機会が少なくなっている。

(4) 地域の中で児童館以外に子どもたちが利用できる、施設・機関、活動等

隣接する「道の駅じよんのび村」、高柳スキー場、地域のコミュニティセンター等、定期的に連携を行う施設が多数存在する。特にコミュニティセンターでは、子ども向けのプログラム等、内容が共通しているものがあるため、交流の機会が多い。

こども自然王国としては移動児童館活動も実施している。特定の組織・施設・団体と継続的に関わり、活動するだけでなく、参加者を通じてつながった団体等とも交流している。

II. 訪問調査の結果

1. 日常的な利用者の過ごし方や職員のかかわりについて

(1) 乳幼児とその保護者の過ごし方と職員のかかわり

① 乳幼児とその保護者は、普段児童館でどのように過ごしているか

上の子が野外活動できるようにと、乳児を抱っこしながら来てくれる母親も多い。自由に動くことのできる上の子は父親がボール遊び等をしている。

② 乳幼児とその保護者にかかわる際に、児童館として留意していること、工夫

授乳室を2か所設けるとともに、ロビーに大型テレビを設置して昔話のDVD等を上映している。ミルクを作るお湯が欲しいと言われた場合はレストランで対応している。

また、上の子が父親と外で遊んでいる間、ちびっ子向けのスペースやロビーのソファでゆっくりしている母親も結構いるので、そういう母親たちと意識的に会話するようにしている。半分くらいがリピーターで、子どもの成長をうれしそうに話してくれるので、そういう方々との関わりを大事にしている。いろいろと話したいことがある母親向けに「もっと話タイム」というプログラムも実施し始めた。

(2) 子どもたち（小学生や中・高校生）の過ごし方と職員のかかわり

小中学校と連携して実施している「小中絆集会」では、普段交流の機会が少ない生徒たちと一緒に館内ラリー等をしてもらい、相互の関係作りを促進している。これには地域の方々にも協力して頂いている。

夏休みにはスタッフが交代で、中・高校生を対象に学習支援を実施している。実施にあたっては、子どもを対象にして随時アンケートを実施しており、参加者の要望をなるべく反映させるように努めている。

子どもたちへの声掛けは多めにするよう意識しているが、距離感は大事にするよう努めている。いきなり声を掛けるのではなく、様子を見て、タイミングを取ってから行うようにしている。家族と一緒に来館していても、一人でいる子どもも多く存在する。保護者主導で来館に至った場合は、子どもが及び腰になってしまい、主体的な活動を行うまでに時間を要する場合も多い。そうした場合は特に配慮して声掛けを行うようにしている。なかにはホームシックになってしまう等デリケートなケースもあり、慎重に接するようにして

いる。保護者には「何かあれば声を掛けてくださいね」とあらかじめ伝えておくようにしている。簡単なことだが、そうすることで、遠慮がちになってしまうのを防ぐことができる。

2. 子どもや保護者の抱える課題と福祉的な対応について

こども自然王国は基本的に家族で野外活動に来る場所なので、家族関係が比較的良好な来館者が多い。なかには不登校等生きにくさを抱える子もいるが、そういう子もここに来て、小さい子の面倒を見たり、イベントの手伝いをしてくれたりするうちに、自然に学校に行けるようになったりしている。

特別支援学校の利用もある。活動を通じて相互の関係性を深めてもらいたいとの願いは一般の学校と同様で、「カヌーに乗りたい」といった野外活動の要望等がある。難しい場合も多いが、スタッフを増員する等して何とか対応している。

3. 児童館における「遊びのプログラム」について

(1) プログラムの捉え方

狙いを明確に定めた一連の活動をプログラム。様々な体験を通じて楽しんでもらうものをイベントと言っている。

(2) 「遊びのプログラム」の内容

① 児童館で実施している「遊びのプログラム」

② それぞれの「遊びのプログラム」のねらいと実施内容

「思いっきり自然体験プログラム」

- ・ 沢登り体験…鯖石川の支流を上流に向かって歩く「沢登り」を行う。
- ・ カヌー教室…鯖石川等でカヌーの漕ぎ方を学び、自然に親しむ。

「コミュニケーションプログラム」

- ・ アドベンチャーゲーム…グループで協力して課題に挑戦する活動。人間関係能力やコミュニケーション能力の向上を目的として行う。

「創作プログラム」

- ・ 和紙ランプシェード…地元高柳の門出和紙を使用したランプシェードを製作する。
- ・ 石のペンダント…蠟石を自由に削ってアクセサリを作る。
- ・ プリズム万華鏡…分光器を使用した万華鏡作りを通じて光について学ぶ。

「食育プログラム」

- ・ コメパンづくり…米粉を使ってパンを作る。
- ・ あんぼづくり…米粉を使って高柳地域に伝わる家庭料理「あんぼ」を作る。

「文化体験プログラム」

- ・なりわいの匠[※]による指導の元、地域に伝わる伝統的な文化・技法を学ぶ。門出和紙、笹団子、しめ縄作り等。（※ なりわいの匠…新潟県知事が認定する高度な技能を有する人材。農産物の加工や地域に伝わる料理方法等を習得している。）

「冬のプログラム」

- ・雪上レクリエーション…「かんじき」を履いて雪国ならではの遊びを楽しむ。
- ・雪上ハイク、スキー教室。

(3) 「遊びのプログラム」の各展開過程で大事にしていること

活動の成果と同時に「過程」も大事だと考えている。子どもたちが課題に取り組む際、途中でさまざまなことが起こるが、子どもたちが主体的に動くようになるべく見守るようにしている。

(4) 子どもとの関りにおいて大事にしていること

プログラムの開始時は子ども同士が初顔合わせであることがほとんどなので、緊張をほぐすよう心掛けている。

子どもたちが活動に熱中しているときや、保護者とコミュニケーションを取っている時間には、過剰な干渉はしないように心掛けている。

(5) 「遊びのプログラム」の評価（効果の検証・分析）方法および課題と改善点

参加者アンケートを分析し、書かれていることの奥にある参加者の本当のニーズを探るよう心掛けている。

III. 考察

全国でも珍しい野外活動を主体とした大型児童館で、しかも宿泊施設まで併設・運営している。さらに夏場はキャンプ場、冬場はスキー場までも運営するアウトドア活動の充実した児童館である。リゾート地に建てられた民間レクリエーション施設のような充実した建物と、多彩な屋外活動の規模を誇っている。このように立派な施設運営を実現できているのは、地域からの要望によって設立されたという経緯に帰するとのことであった。密接に結びついた地域との信頼関係を通して、有形無形のサポートが得られていることがこの施設の多様な活動を実現できている鍵となっているようである。また、直接来館者に触れ合う機会の少ない運営スタッフも一丸となって、シーズンに合わせたテーマを考えて（例：冬季限定雪だるま姿のデザート開発等）利用者を温かく迎えている。

こども自然王国はカヌーやスキー、ハイキング等の本格的な野外活動を行っていることもあり、一般的な住宅地にある児童館の職員に求められるスキルだけではなく、アウトド

アウトドア活動の専門性も求められる特殊な児童館と言える。自然の中に子どもたちを連れ出すにはアウトドア活動の専門的なスキル、さらに子どもたちをリードできる体力も求められる。児童館職員だけではカバーし切れないそれらの課題には、若くて活動的な地元の大学生が業務補助として参加する仕組みが整えられていて、アウトドア活動の幅を広げている。

また、山間部に設置された大型児童館のため、利用者像は地域の常連が日常的に利用するような住宅街の小型児童館のそれとは異なり、地域外あるいは県外からの1回限りの利用か定期利用でも1年に1回～数回という利用者が多く、団体利用者の割合も高い。そのため域外から来る利用者ニーズは、日常都市では体験できない特殊なアウトドア活動が目的で、「地域の子どもたちが日常的に訪れ、自由に過ごせる居場所」という使い方とは異なる。

しかし、こども自然王国の周辺地域に住んでいる子どもたちが安心・安全に過ごせ、家庭でも学校でもない「居場所」が必要とされ、求められている。

そのような地域の子どもたちの「居場所」として、本館と離れ屋根付き広場の反対側に建てられた別館の中に、地域の子どもたちが過ごすことができる部屋が「ジュニアリーダーズクラブ室」として用意されている。

本施設は、来館目的が異なる地域外の団体利用の子どもたちのニーズと地域の子どもたちのニーズを両立させるため、外部からの利用者対応の大型児童館の中に地元の子ども対応の小型児童館のような部屋を内包させ、それぞれのニーズに応えられる施設構成となっている。



ヒアリングの様子



ヒアリング調査風景



屋外活動



屋根付き広場と渡り廊下



地元の子どもたちが自由に集えるクラブ室



プログラムの告知

長野県松本市 寿台児童館

訪問調査日 平成 30 年 10 月 25 日(木)

ヒアリング対象者 長野県松本市 寿台児童館 館長 竹内 公子
児童厚生員 設楽 秀子
ワーカーズコープ松本事業所 所長 伊藤 由紀子
副所長 久保 愛
松本市旭町放課後児童クラブ 竹内 亜哉

訪問調査者 野中、野澤、中村

I. 概要

1. 児童館等の概要について

(1) 施設規模 小型児童館

(2) 運営組織 NPO 法人ワーカーズコープ 松本事業所

(3) 開館年月 1980 年（昭和 55 年）3 月

(4) 職員体制 児童厚生員 2 名、障がい加配職員 1 名
つどいの広場支援員 2 名

(5) 年間運営費 約 1,155 万円（平成 29 年度）

(6) 年間利用者数と、その内訳（乳幼児・保護者、小学生、中学生、高校生、その他）

平成 29 年度

【児童館】月～金 12:30～19:00 / 土 8:00～19:00 / 日曜・祝祭日・年末年始休館

年間 5,220 人（幼児 48、小学生 4,275、中学生 212、高校生 169、その他 516）

（年間開館日数 292 日、1 日平均 18 人）

【つどいの広場】月～金 9:00～14:00（乳幼児・保護者対応事業）

年間 3,114 人（乳幼児 1,638 人、保護者 1,476 人）

(7) 年間活動計画・報告等

① 児童館の運営方針

（平成 29 年度目標）

- ・自分も他人も大切に出来る思いやりと包容力を養う
- ・子どもたちが自主的に学び、考える中で、自分と違う文化や環境の人を受け入れる。

（平成 30 年度目標）

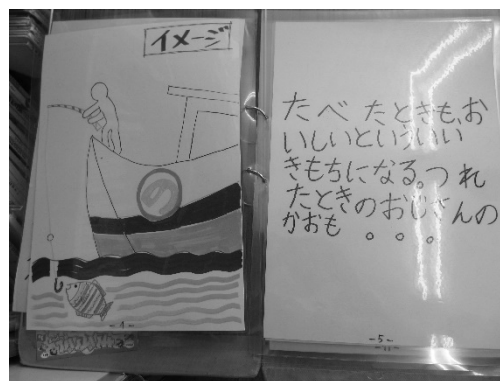
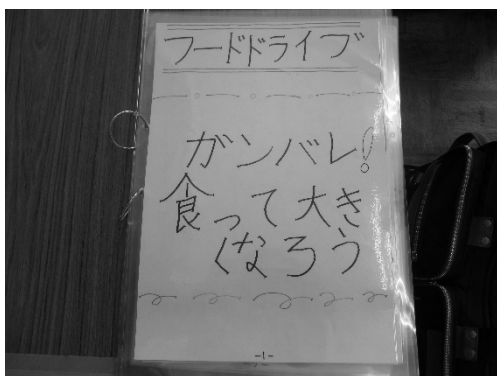


- ・子どもが気軽に遊びに来られる児童館
- ・地域の人や子どもが仲良く集える居場所づくり

② 1年間の活動計画

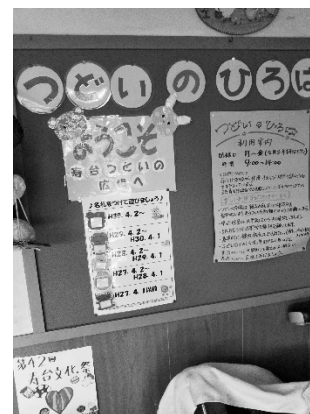
【児童館】

- ・学習支援＋軽食（通年）
- ・フードドライブ（通年）
- ・お話の会（通年）
- ・寿台わくわくハッピーワールド（通年）
- ・寿台ハッピー食堂
- ・畑（季節の野菜）
- ・卓球教室
- ・マンカラ大会
- ・創作絵本作り
- ・夏祭り、秋祭り
- ・防災段ボールキャンプ
- ・レゴブロック展示会
- ・クリスマス会
- ・お雑煮会
- ・保護者交流会



【つどいの広場】

- ・はじめましての会
- ・こいのぼり工作（足型こいのぼり）
- ・子育て出前講座
- ・リトミック
- ・夏祭り
- ・ミニ運動会・伝承体験講座「夏野菜漬物」
- 「抹茶の会」「フラワーアレンジメント」「お汁粉試食会」
- ・クリスマス会
- ・親子工作
- ・ひな祭り会



(8) 自治体における児童館の位置づけ（児童館設置数、子ども育成計画等の内容、他）

- ・松本市には 27 か所の児童館があるものの、市のウェブサイトや『松本市子ども・子育て支援事業計画 平成 27 年度～31 年度（平成 27 年 3 月）』には児童館の本来の機能や活動内容についての記載はなく、放課後児童健全育成事業の実施場所として紹介されているのみである。

2. 周辺環境について

(1) 地域の状況（産業、地域特性、交通事情など）

- ・松本駅の南約 8 キロに位置する。市町村合併で松本市になった地域である。
- ・個人住宅と市営・県営住宅が混在している住宅街。
- ・市営・県営住宅は古くなったものが多く、地域住民は高齢化が進んでいる。
- ・松本市の中でも生活保護世帯・外国籍（特に中国籍・ブラジル籍）の世帯が多い地域である。

(2) 児童館と地域住民や地域組織とのかかわり

- ・職員が地元に住んでいることもあり、児童館の活動を理解し、気に掛け、日常的にサポートしてくれている。
- ・町会組織や福祉ひろば、公民館などとの関わりが深い。
- ・地域ボランティア、民生委員等にも協力してもらっている。
- ・2014 年から地域の協力を得て学習支援を始めた。勉強するときに横に座って見てもらうだけなのだが、それによって子どもたちは随分と落ち着いてきた。
- ・2016 年にスタートした事業「寿台ハッピー食堂」でも地域の協力を得ている。賞味期限間近の食品を頂いたり、調理のお手伝いに入ってもらったり、公設市場から野菜を提供して頂いたり、さまざまに力になってもらっている。

(3) 子どもの育成環境（児童館職員から見て、子どもの育ちとのかかわりで特徴的なことがあれば。）

- ・松本市の周辺部に位置しており、ひとり親家庭が多い。

(4) 地域の中で児童館以外に子どもたちが利用できる、施設・機関、活動等

- ・図書館、公民館、福祉ひろば、公園、体育館等。

(5) その他、地域の特徴

- ・高齢者ばかりでなく、子どもを大切にしようとの気持ちの強い町会役員がいてくれる。

Ⅱ. 訪問調査の結果

1. 日常的な利用者の過ごし方や職員のかかわりについて

(1) 乳幼児とその保護者の過ごし方と職員のかかわり

- ・乳幼児とその保護者への対応は「つどいの広場事業」として、児童館の一室に子育て経験のある有資格者「つどいの広場支援員」（保育士、幼稚園教諭等）2名が常駐して実施している。

① 乳幼児とその保護者は、普段児童館でどのように過ごしていますか？

- ・おもちゃで遊びながら、親子でゆったり過ごしている。
- ・他の親子と関わりながら交流を深め、育児や地域の情報交換を行っている。
- ・体操や絵本の読み聞かせなど、集団で過ごす時間を楽しみに来館してくれている。

② 乳幼児とその保護者に関わる際に、児童館としてどのようなことに留意していますか？

(ア) 心地よく過ごしてもらうために意識して行っていることは何ですか？

- ・清潔であることを常に心掛ける。館内の美化を工夫する。おもちゃの消毒などを定期的に行っている。

(イ) 主体的にかかわってもらうために意識して行っていることは何ですか？

- ・ただ親子で遊びに来る場ではなく、自分自身も、他の親子の助けになることをしようと思える場であるように、相互扶助の精神が広まるように働きかけている。

(ウ) 保護者同士の関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・支援員が母親同士に共通の話題を提供し、つながるきっかけを作る。
- ・地域の育児サークルを紹介する。
- ・行事を通して、お互いに関わりを持ってもらう。

(エ) 施設や職員との関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・支援員は常に謙虚に利用者に向き合うようにしている。
- ・支援員は常に笑顔で、利用者から話しかけられやすい雰囲気を心掛けている。

(2) 子どもたち（小学生や中・高校生）の過ごし方と職員のかかわり

① 子どもたち（小学生や中・高校生）は普段、児童館でどのように過ごしていますか？

- ・放課後児童クラブ登録児童が約20名。一般来館児童が5～10名（1日平均）。ホールでボール遊びをしたり、図書室で本を読んだり、思い思いに過ごしている。職員も積極的に子どもたちの間に入って、なるべくたくさんの方の会話をするように心がけている。

- ・中学生は自分で目的を持って来る子が多い。最近は卓球をしに来る子が多い。
- ・高校生は、周辺の3つの高校から、ボランティア部の生徒たちが部活動として来館している。小学生と遊んでくれたり、行事に参加してくれたりしている。帰りがけに職員と話をしていくことも多く、家族にも学校の先生にも話せないような悶々とした思いを話していく子もいる。

② 子どもたちとかかわる際に、児童館としてどのようなことに留意していますか。あるいは、どのような工夫をしていますか。

(ア) 居場所づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・できるだけたくさんの方の言葉を引き出し、自分たちがやりたいことを実現できるようにサポートするよう心がけている。
- ・高校生は近い将来大人になるので、「大人の社会とはこういうものだよ」ということを教えつつ、でも「助けて」って言いたいときにそれが言えて、助けてもらえる場所があるということを伝えるようにしている。
- ・高校生ボランティアは、学校によってカラーや求めるものが異なる。子どもたちと遊ぶことが中心の学校もあれば、子どもが少ない日に来て館内の整備をしてくれる学校もある。それぞれの意向に添った活動をお願いするようにしている。

(イ) 主体性を育むために意識して行っていることは何ですか？

- ・子どもたちとの普段の何気ない会話の中から言葉を拾い、やりたいことを探って水を向けるようにしている。
- ・結果を急いで求めようとせず、じわじわと自信を付けられるようにスモールステップで取り組むようにしている。
- ・行事のポスターを近隣に貼ってもらいに行くのも、最近は子どもたちだけで行ってもらっている。どう言ったら「貼らせて欲しい」という自分たちの思いが伝わるのか、事前に児童館で練習して行ってもらう。地域の人たちも、子どもたちが何の目的で来たかって言うまで待っていてくれる。そういう大人がこの地域にはいっぱいいる。
- ・子どもたちの状態を見ながら、もう一歩進んだ活動を提案することもある。ある高校のボランティア部の子たちはいつも普通に来て遊んで帰るということが続いていたので、昨年の秋祭りの際、「よかったら自分たちのブースを1つ出してみない」と持ちかけてみた。高校生たちはあれこれ悩んで、「マンカラコーナー」のブースをやることに決めた。簡単な企画書も書き、当日は地域の高齢者や赤ちゃんを連れてお母さんにも手伝ってもらってやり遂げた。

(ウ) 子どもたち同士の関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・けんかしたり仲良くなったりを繰り返すのは大事な経験。その経験の機会を保障し、子

ども自身が関係を作る力を育てるようにしている。

- ・けんかして仲直りしたように見えていても、わだかまりを残している場合がある。だから、そのフォローを注意深く行っている。子どもと職員と 2 人だけになる時間を作り、十分に本音を聞いた上で「今度からこうした方がいいかもね」などとアドバイスをしている。

(エ) 施設や職員との関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・とにかく聴くことを心がけている。知っていることでもとぼけて知らない振りをして聴き、子どもたち自身の言葉を引き出すようにしている。「聴いてあげるから何でも言いなさい」って言われるとかえって話しにくいので、あえていい加減な感じで、「この人だったら話せる」という雰囲気を作っている。子どもたちが何気なく話してくれる中に大事なことが含まれていたりするので、それを吸い上げるようにしている。
- ・「先生」としてではなく、「自分自身」として子どもと関わるようにしている。そのようにしないと子どもたちも肩に力が入ってしまう。
- ・自分は食が専門なので、「今日のご飯食べたの？」なんてことからよく話すようにしている。あと、その子自身やその子の好きなことに興味を持ってあげることがとても大事で、あのアイドルグループのメンバーは誰がいるんだろうとか、ゲームについてもほとんど分からなかったのだけど、そういうことも勉強して話題を振るとたくさん話をしてくれる。
- ・1、2年生はまださみしがり屋なので、くっついているときに一緒にぎゅーってしてあげたり、本当に頑張ったときには「よく頑張ったね」って頭をぐしゃぐしゃにして褒めてあげたりと、軽いスキンシップも大事にしている。
- ・職員同士の関係が良くないと、子どもにも影響する。だから、とにかく職員同士で話し合いをたくさんするようにしている。

2. 子どもや保護者の抱える課題と福祉的な対応について

(1) 子どもたちや保護者の様子について、気になることや対応していることはどのようなことですか？

- ・最近親がとても忙しくて子どもに十分な関心が寄せられていない。また、暮らしが便利になった反面、基本的な生活スキルを身につける機会が失われている。

(2) それに対して児童館として取り組んだ事例があれば、具体的なエピソードをお話してください。

- ・子どもたちにはさまざまな体験を通じて生活スキルを伝えるよう心がけている。包丁を使う、針に糸を通す、縫い物をする、編み物をする、アイロンを掛ける等、「やれば自分でもできる」ということを伝えている。

3. 児童館における「遊びのプログラム」について

(1) プログラムの捉え方

- ・「プログラム」という言葉は使っていない。「行事」と言っている。
- ・毎週・毎月等の定例の企画も、子どもたちと一緒に準備をしながら作り上げていく活動も、特に使い分けることなく基本的に「行事」という言葉で括っている。
- ・「Happy食堂」だけは「食堂」と言っている。(テーマ性の強いものについては、それにふさわしい名称が使われている。)

(2) 「遊びのプログラム」の内容

- ・2014年度から県の交付金を利用して学習支援を実施している。対象は学習塾に通えない中学生や学習習慣を付けたい小・中学生。
- ・休日は食事をしない、菓子パンやスナック菓子で食事を済ませている、好き嫌いが激しい、いつも一人で食事している等、子どもたちの食生活に課題が多いことを知り、2016年から「Happy食堂」という子ども食堂事業を開始した。食事と合わせて学習や遊び、様々な体験活動などを実施している。(2018年度の実施内容は、手巻き寿司と昔遊び、朝ご飯と宿題〈夏休みに開催〉、防災炊き出しと防災の話、調理体験と地域交流等)
- ・2017年からは、学習支援と食事を合わせて行う「おむすびくらぶ」も開催するようになった。(三角おむすびくらぶは、週1回平日16～18時、高学年・中学生を対象に専門の講師が学習支援を行い、途中でみんなで食事をするというもの。土曜おむすびくらぶは、月1回土曜日10～12時、小学生を対象に職員・地域ボランティア・学生が寄り添い、宿題や食事に加え、さまざまな体験活動を実施するというもの。)
- ・児童館でのさまざまな取り組みを通じて、子どもたちは自らの発案を企画の形にまとめ、準備をし、当日の進行まで担うことができるようになってきた。これには、高校生ボランティアのみなさんが遊びや運動、行事の手伝いなど多岐にわたって協力してくれたことも大きく影響している。
- ・地域には外国の子どもたちも多いので、相互理解を深めるために年間を通じて世界のさまざまな国の文化(言葉や食べ物など)を学ぶ事業「わくわくHappyワールド」を開催した。2018年度の内容は、世界の国旗当てクイズ、(中国人児童による)中国語講座、(ブラジル人保護者による)ブラジル料理教室、カンボジアに送る楽器清掃とタピオカミルク(カンボジアの味)作り、水餃子教室、国旗カルタ、チヂミとホットク(韓国のお菓子の1つ)作り等。
- ・上記以外の主な取り組み
 - 移動児童館…新しくなった体育館で、ドッジボール大会やスリッパ飛ばし大会、世界旅行気分撮影会を開催した。
 - 高校生ボランティア…年間を通じて高校生ボランティアに来てもらった。お兄さんお姉さんに遊んでもらって、子どもたちは大喜びだった。

保育園や図書館でのおはなし会…夏休みスペシャルとして、手作り絵本の読み聞かせ会を実施した。

(3) 「遊びのプログラム」の各展開過程で大事にしていること

① 「遊びのプログラム」を作成する際にどのような準備をし、どのようなことを大切にしますか。

- ・年間行事予定を子どもたち自身に考えてもらっている。強制するのではなく、「私（職員）も忘れやすいから、クリスマス会とか、みんながやりたい行事は書いておいてくれないと、やらないかもよ」というようなとぼけた言い方で。大きな紙に書いて、貼り出してもらっている。行事の横にはそれをやりたいと言い出した子どもたちの名前も書いてもらい、実際にやる際には実行委員をやってもらうようにしている。

② 「遊びのプログラム」の実施中、特に配慮しているのはどのようなことですか？

- ・子どもたちは単なるお手伝いではなく、職員と一緒に行事を運営する対等の仲間という意識でいる。そのため、当日に向けて作成する計画書は大人と同じフォーマットのもの渡すようにしている。そうすると子どもたちにも責任感が生まれ、一層乗ってくる。（レゴ作品の展示会の計画書には、狙いとして「みんなで譲り合って仲良く使う」と書かれている。）そういうことをずっとここでは大事にしている、だからやりたいことを聞くと子どもたちの中からいろいろ出てくるし、行事の後には子どもたちが自主的に集まって反省会を行ったりもしている。3年もすると、職員よりも先に「僕たち、そろそろ動きたいんだけど」と子どもたちの方から言ってくる。
- ・子どもたちの疲れ具合なども見ながら、行事のタイミングをずらすなど、臨機応変に対応している。

(4) 子どもとの関りにおいて大事にしていること

① 「遊びのプログラム」を展開するすべての過程において、職員やボランティアが子どものかかわりにおいて大事にしていることは何ですか？

- ・以前は単に年間を通じていくつかの行事がポンポンと並んでいた。今はどんな小さな行事でも、それぞれのプロセスがあって、それが次の行事につながっている。

(5) 「遊びのプログラム」の評価（効果の検証・分析）方法

① 「遊びのプログラム」は通常どのように評価していますか？評価のポイントや方法を教えてください。

- ・子どもたちとの反省会…子どもたちにまず、白紙に自由に感想を書いてもらっている。人の配置がどうだったかなど特定のことを職員から質問してしまうと他の感想が出てこなくなるので、自由に書いてもらっている。

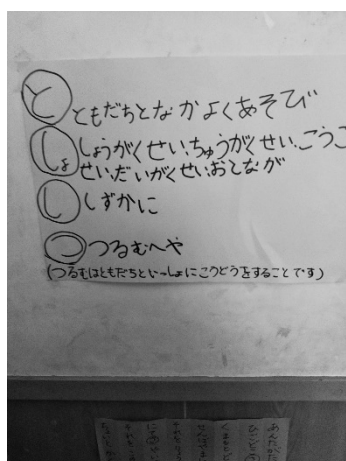
- ・児童館でやる工作は、作った作品と一緒に、家でも同じように作れるようにレシピを持ち帰ってもらっている。母親から「家でもう1回作ってみました」という声を聞くことがあるが、そのようなところからも反応を探ることができる。
- ・同様に児童館での活動をきっかけに子どもたちが家でも包丁や針やアイロンを使ってお手伝いをするようになり、母親から感謝されることがある。このようなことも評価につながるのではないかと思う。
- ・児童クラブによっては、行事が終わるとその日のうちに決まった場所にカレンダーの紙を裏にして貼る。子どもたちはそこに、自分の感想を好きに書くようになっている。盛り上がった行事のときは1日も経たないうちに子どもたちの声でいっぱいになり、書き切れなくなってしまう。

② その評価はどのように活用していますか？

- ・子ども食堂については、定期的にアンケートを取って、メニュー等の改善に努めている。

③ その評価は「遊びのプログラム」の改善に実際に役立っていますか？

- ・1つの行事の評価が、次の行事につながっていくことがある。「針を使えるようになった」「火を起こせるようになった」「じゃあ、それを使って〇〇しよう」など。以前は行事のための行事という感じで、それぞれの行事がぶつ切れになっていたが、最近は全ての行事が「反省し、それを次に生かす」ということで繋がっている。できることが増えたり、リーダーシップを発揮したりと、子どもの可能性がどんどん広がっているように感じられる。

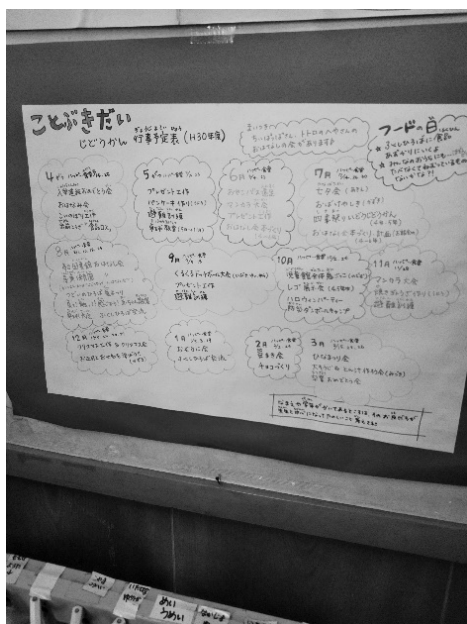


Ⅲ. 考察

- ・年間を通じた利用者の半数以上が放課後児童クラブ登録児童である。そのため、利用者のニーズの把握や行事等への反応も把握しやすい環境がある。
- ・以前は前例踏襲型で子どもたちの状況と関係なく決まった行事をこなしていたが、近年は子どもたちの日常の延長線上に行事があるという発想から、個々の行事に至るプロセスや、行事間の連続性を大事にしているとのことだった。
- ・職員の話からは、子どもたちが何に困っているのか、どこにつまずいているのか等のことについても、子どもたちの背景を掴もうとする姿勢が感じられた。最近、子どもたちが落ち着いてきたという話もあったが、子どもたちは寄り添ってくれる大人に出会えたことで落ち着きはじめたのではないだろうか。
- ・子どもたちの声を聴くことをとても重視している。それとなく自然に話を聴いていて、子どもたち自身の気持ちを引き出すようにしている。話をしっかり聴いてくれるからこそ子どもたちは声を上げるし、それが、子どもたちの主体性を育むことにもつながっている。(子どもたちの日々のつぶやきを職員がまとめた文集も発行している。)
- ・来館している子どもと家庭の状況を把握して、実生活に必要な裁縫や料理などの生活体験を活動に多く取り入れている。
- ・指導員にゆったりと見守ってもらえる環境の中で、子どもたちは活動におもしろさを見出し、少しずつではあるが生活スキルを身につけている。それは同時に、子どもたちの自尊感情を育むことにもつながっており、自立支援にもなっている。
- ・年間行事予定を子どもたち自身が作成し、自分が考えた行事は「子どもスタッフ」として責任を持って企画・実施にあたるという。子どもたちはそれによって充実感を得ながら主体的に活動するようになるし、児童館が自分たちにとっての居場所と感じられるようになる。
- ・行事を実施した後には、スタッフとして働いた子どもも交えて反省会を実施している。子どもからもさまざまな気付きが述べられるというが、それら一つひとつが子どもの成長を確認するものであり、それを踏まえてまた次の行事につなげている。
- ・職員間での話し合いの機会を多く持つようにしている。そのため、児童館活動の意味や子どもと関わる際に大事にすべきこと等について、共通の意識を持つことが可能となっ

ている。

- ・館長・児童厚生員の方々は、児童館ガイドライン等を特に意識して取り組みを進めるといふ訳ではないが、その理念や目的を実践の中で体現している雰囲気があった。その結果、子どもたちが主体的に行動したり、お互いを尊重し合ったりする等の変化が見られることによって、館長・児童厚生員自身の学びにつながっている循環が生まれていることが伺えた。



愛知県児童総合センター

訪問調査日 平成 30 年 10 月 24 日(水)

ヒアリング対象者 愛知県児童総合センター 館長 上野 裕
主査 阪野 大介
児童厚生員 高阪 麻子

訪問調査者 安部、中村

I. 概要

1. 児童館等の概要について

(1) 施設規模

「児童館の設置運営要綱」に定める「大型児童館（A型）」

(2) 運営組織 管理運営：公益財団法人愛知公園協会

(3) 開館年月 平成 8 年 7 月 24 日

(4) 職員体制 職員数 18 名、うち主査 2 名は本部派遣（平成 30 年度現在）

(5) 年間運営費 平成 28 年度 219,931,588（単位：円）

(6) 年間利用者数と、その内訳（乳幼児・保護者、小学生、中学生、高校生、その他）

平成 29 年度 入館者数（団体を含む） 開館日数 320 日 単位：人

合計 374,286（乳幼児 124,678、保護者 159,168、小学生 85,851、中学生 4,067、高校生 522）

(7) 年間活動計画・報告等

① 児童館の運営方針

「子どもたちが健全に発育するためには、あそびが重要な役割を担う」を、基本理念として、児童館の運営に携わっている。施設として大事にしていることは、不特定多数の方が利用する大型児童館であり、愛知県全域のみならず、他県からの利用者も多いため、幼少のころの思い出の 1 コマに、この児童館が記憶に残るような施設になることを目指している。

② 1 年間の活動計画

以下の 4 つの機能を軸に事業を展開

・『体験・育成』 館内すべてのスペースで遊びを展開し、見る・聞く・触る・感じる・考



える・身体を動かすといった全身の感覚をフルに発揮させるプログラムを実施する。

- ・『開発・調査』 当センター並びに、県内市町村児童館活動の活性化を図るため、プログラムの開発、企画を行う。児童環境づくりを推進するための、様々な調査を行う。
- ・『養成・研修』 県内の児童厚生員やボランティアを対象とした研修を行う。
- ・『普及・啓発』 子どもについて考えるすべての人を対象とした講座やシンポジウム、セミナー等を開催。移動児童館を活用して県下の市町村に出向き、当センターで開発した新しい遊びを地域の子どもたちに届ける。

③ 1年間の活動報告（まとめ）

<平成28年度事業報告>

- ・『体験・育成』 特別企画事業、一般活動事業、集団活動事業、屋外環境づくり事業、食育事業、他団体との共同事業（児童厚生施設との共同事業、大学との連携、リニモたんけん隊、企業等との共同事業 連携事業）
- ・『開発・調査』 遊びの公募（開発）事業
- ・『養成・研修』 県内市町村児童館とのネットワーク構築、愛知県児童館連絡協議会事務局、市町村職員及び児童館職員研修、子育て支援者等活動プログラム研修会（ボランティア研修会）、講師派遣、全国児童厚生員研究協議会に参画、愛知県地域活動連絡協議会事務局、大学等の実習生受入、大学生・児童委員等団体の見学の受入
- ・『普及・啓発』 あそびの相談事業、移動児童館事業、県内市町村の全児童館の交流大会、子育てひろば（あのねっとのへや）の開設、小さい子どもたちと親等のための遊びのプログラムの開発と提供、親子で遊ぶクラブ活動事業、お父さん応援プログラム、祖父母力アッププログラム、子育て支援者のサポート事業、地域子育てサポート事業、児童環境づくりの啓発、年間活動報告書の作成・発行、ACCレターの作成・発行、あそびのプログラム集の作成・発行、ポスター・チラシなどの作成・配布等
- ・『その他』 子ども運営会議、委託事業（イクメン応援キャラバン隊2016「お父さんを楽しもう！」）



(8) 自治体における児童館の位置づけ（児童館設置数、子ども育成計画等の内容、他）

- ・愛知県内に 290 か所ある地域児童館の中核、指導的立場。
- ・先駆的なあそびの開発を行い、地域児童館に代わってプログラムを開発する。

2. 周辺環境

(1) 地域の状況（産業、地域特性、交通事情など）

- ・愛知県東部に立地している。利用者は車利用が多い。
- ・隣市に瀬戸焼で知られる、瀬戸市がある。

(2) 児童館と地域住民や地域組織とのかかわり

- ・リニモを運営している、愛知高速交通株式会社の協力を得て「リニモ探検隊」を実施。
- ・瀬戸市にある愛知県陶磁美術館と共同で、ACC「土どろ、ウォーキング」「あなをほる」を実施。
- ・遊びの相談事業：地域の児童館職員からの、あそびに関わる相談に応じ、プログラム内容を提供、物品貸出、プログラム講習会を開催。
- ・移動児童館事業：県内市町村の児童館等に出向き、当センターの特別企画等で開発した新しい「あそびのプログラム」を実施。

(3) 子どもの育成環境（児童館職員から見て、子どもの育ちとのかかわりで特徴的なことがあれば）

- ・「あなをほる」プログラムを実施するために、他の地域児童館によっては許可申請の問題が発生したり、掘っているとコンクリートにぶつかり掘れなかったりと、やりたいプログラムがどこでもできる環境がない。
- ・意識の高い親が、子どもにあれこれ指示を与えてしまう。

(4) その他、地域の特徴

- ・自動車産業を基盤とした会社や社宅のつながりが強く、転入出も多い。

II. 訪問調査の結果

1. 日常的な利用者の過ごし方や職員のかかわりについて

(1) 乳幼児とその保護者の過ごし方と職員のかかわり

① 乳幼児とその保護者は、普段児童館でどのように過ごしていますか？

- ・施設内の遊具やコーナーで、親子で遊ぶ。
- ・プログラムに参加する。

② 乳幼児とその保護者にかかわる際に、児童館としてどのようなことに留意していますか。あるいは、どのような工夫をしていますか。

(ア) 心地よく過ごしてもらうために意識して行っていることは何ですか？

- ・スタッフは絶対的に、親の味方でいること、親を評価しないように気を付けている。
- ・あそびやプログラムは、親と子ども両方に楽しんでもらえるように努めている。

(イ) 主体的にかかわってもらうために意識して行っていることは何ですか？

- ・大人も楽しめるように、あそびやプログラムにまきこんでいく。
- ・子どもはできなくて当たり前ということを親に伝える。

(ウ) 保護者同士の関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・未就園児向けの連続講座では、あそびのプログラムの後に、親だけで集まって、話す機会を設けたり、「ママノジブンジカン」という時間では、グループでコラージュを製作することで、グループ活動を通し、関係を深め合える時間を設けた。

(エ) 施設や職員との関係づくりのために意識して行っていることは何ですか

- ・子どもに対して親が評価のまなざしになりがちであるため、子どもはできなくてあたりまえと、「親をほぐす言葉掛け」を心掛けている。



(2) 子どもたち（小学生や中・高校生）の過ごし方と職員のかかわり

① 子どもたち（小学生や中・高校生）は普段、児童館でどのように過ごしていますか？

- ・保護者同伴で来館する小学生は、中学年くらいまでで、高学年は親と来るのが恥ずかしくなるのか、少ない。高学年は遠足等で、学校の行事として利用することが多い。
- ・中学生は少ない。
- ・高校生は少ない。利用者としてというよりは、ボランティアとしての関わりが多い。
- ・中高生向けのプログラムが少ないことと、1つのプログラムの時間が短いことで、関係作りまで持っていけず、継続的に関われない。
- ・当施設が県内の端であり、子どもが自力で来ることが難しいという立地問題がある。きっかけが親でも、その後1人で通うことが難しく、次につながらない。
- ・ジュニアリーダーを立ち上げるという動きがあったが、立地の問題や特定の子どもしか集まらないこと、意識の高い親が申し込むなど、年齢の高い子どもが自発的に集まらない。

② 子どもたちとかかわる際に、児童館としてどのようなことに留意していますか。あるいは、どのような工夫をしていますか。

(ア) 居場所づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・大型児童館であるため、いろいろな地域から不特定多数の人が利用することを念頭に置き、エンターテイメント性を大切にして、その場の空気を盛り上げるようにしている。

(イ) 主体性を育むために意識して行っていることは何ですか？

- ・プログラムに造形性のものが多い。これは設立以来、子どもの主体性を育むため取り組んでおり、子どもたちのやりたいことを最大限尊重し、スタッフは黒子に徹することを基本としている。

(ウ) 子どもたち同士の関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・グループを作る際、兄弟は別のグループにする等、面識のない子ども同士の交流が生まれるようにしている。大型児童館のため、特定の子どもと関わる交流時間がなく、継続的に関わっていくケースは少ない。

2. 子どもや保護者の抱える課題と福祉的な対応について

(1) 子どもたちや保護者の様子について、気になることや対応していることはどのようなことですか？

- ・「あのねっとクラブ」は連続5回のプログラムで、子どもと遊びをした後、お母さんだけで話す機会を設けているが、そこで、地域の児童館など、近所の繋がりがある場所では話せないことや、悩みを打ち明けられることが多い。そのためスタッフは保護者を否

定せず、話を聞くように努めている。

(2) それに対して児童館として取り組んだ事例があれば、具体的なエピソードをお話しください。

- ・「あのねっとクラブ」では、親の悩みや、不満に対して、スタッフは聞き役になるだけだが、利用者は悩みや不安を吐き出すことで満足して帰っていく。

3. 児童館における「遊びのプログラム」について

(1) プログラムの捉え方

- ・「あそび」と「あそびのプログラム」は違うものという認識。
- ・自発的に遊ぶものがあそび、目的があるものがプログラムと言葉の使い分けをしていると認識している。
- ・利用者に告知、広報するときは、プログラムという言い方はあえてしていない。イベント的なあそびとしてパンフレットを作って告知している。
- ・子どもたちはプログラムという呼び方はしていない。プログラムに名前がついているので、そのプログラム名で呼ぶことが多い。

(2) 「遊びのプログラム」の内容

① 児童館で実施している「遊びのプログラム」を教えてください。

- ・ハンティングワード
館内に貼ってある文字カードを探して、見つけた文字を並べ替えて言葉をつくる。
- ・粘土
テーマを決めて、自由につくってもらう。
- ・あなをほる
谷川俊太郎の「あな」という本をもとにして、期間中ただあなを掘るという、イベント感がつよいプログラム。
- ・脱出ゲーム
閉館後の館内で、親子が館内に閉じ込められ、力を合わせて謎にチャレンジして脱出を目指すプログラム。



② それぞれの「遊びのプログラム」のねらいと実施内容を教えてください。

・ハンティングワード

「探す」という宝さがしゲームの感覚で、何回やっても楽しいあそび。文字を貼る場所や文字数を変えたりして難易度を上げていくと、1～2時間探すだけの遊びを何度も繰り返して遊ぶ子どもが少なくない。

・粘土

アートの切り口から遊びを考えた。好きな形、好きな色を子ども自身が自分の好みにそって選ぶことができる。感覚的な遊びで、表現の遊びの中でも高いスキルが必要なく、子どもたちの個性が表現できる。つくった粘土は持ち帰ることができないので、上手に見立てよく作ることが目的ではなく、新しいチャレンジを楽しみ、新しい自分を発見することができる。

・あなをほる

ただただ自然に親しむため、素朴なことから始めようと発案されたプログラムである。本の「あな」を最初によみ、ただ掘って、ただ埋める。自分の感覚で何かを発見し、自分の感覚で何かを感じる。

・脱出ゲーム

親子で（特にお父さん）楽しめるプログラムを作りたい希望があり、お父さんが本気で楽しめるものとして考えられた。親子で館内のさまざまな謎を解いていく。大人が介入しないと解けない問題もあり、チームワークが必要である。

(3) 「遊びのプログラム」の各展開過程で大事にしていること

① 「遊びのプログラム」を作成する際にどのような準備をし、どのようなことを大切にしますか。

- ・プログラムで使用するものは、子ども用を使わない。子どもだましをしない。「本物に出会う楽しさ」は、子どもにも大人にも対等で、共通の体験、共感を体験してほしい。

② 「遊びのプログラム」の実施中、特に配慮しているのはどのようなことですか？

- ・粘土等の創作系プログラムの場合、親が子どもに対して意見することが多いので、親にも粘土を渡し、「一緒に楽しみを共有してください」と勧めている。それぞれが個性的なものを作り、親に子の発想力を認めてもらうようにしている。
- ・粘土などの製作物は、持ち帰ることをやめたことで、出来上がりを気にせず作る行為に集中できるようになった。ただ、できたものを持ち帰らないことを定着させるために、利用者には理解が得られるようその都度説明するよう努めた。

(4) 子どものとの関りにおいて大事にしていること

- ・「上手だね」という言葉は使わない。「すごいね」と子どもの発想力を認めるような声か

けをしている。

- ・保護者にとって、職員は絶対的に保護者の味方であること。
- ・大人を巻き込んで子どもと一緒に楽しむ。

(5) 「遊びのプログラム」の評価（効果の検証・分析）方法

① 「遊びのプログラム」は通常どのように評価していますか？評価のポイントや方法を教えてください。

- ・参加者アンケート
- ・来館者数
- ・リピーター率
- ・子どもの変化に関するエピソード（②参照）

② その評価はどのように活用していますか？

平成 22 年に、愛知県内の児童館からそれぞれ、日々のエピソードを募集して、「ちょっといい話」として、まとめ、冊子として配布した。子どもの観察や子どもとのやりとりをエピソードにしたものであるが、職員の働きかけによる子どもの変化を共有できた。

③ その評価は「遊びのプログラム」の改善に実際に役立っていますか？

評価という形ではないが、子どもや親を観察し、その変化を、次の企画につなげている。たとえば、「あなをほる」では当初「子どもがあなをほるのに飽きてしまうのではないかと懸念し、たくさんのおもちゃをひそかに準備していた。ところが、子どもたちはまったく飽きずひたすらあなを掘り続けたため、おもちゃは全く必要なかった。このような子どもの姿からプログラムを改善する試みは実施している。

④ その評価について改善すべき点があるとしたら、どのようなことですか？

- ・今まで実施しているやり方でいいのかという疑問がある。たとえば、来館者数はひとつの指標となるものであるが、少子化が進む中でいつまでも来館者数だけでいいのか。

⑤ その他

- ・自己評価ができでいない現状がある。
- ・プログラム参加者の追跡調査は実施していない。
- ・利用者のアンケートを他の利用者が目にする機会がない。
- ・プログラムのエピソードが表にでる媒体がない。
- ・当館ではあそびのプログラムの開発に対するスタッフ評価はない。勤務評定の項目の中にはない。地域の児童館も、自治体ごとの公務員評価にとどまっているのではと推測する。

- ・愛知県児童館協会と組んで、研修を行っているが、研修受講人数以外の効果測定が実施されていないため、内容を持ち帰って、どのように動いたのか状況が把握できていない。

(6) 「遊びのプログラム」の評価（効果の検証・分析）の具体例

- ・あのねっとクラブに参加した母親からのアンケートより
「上の子と下の子の育児で毎日ばたばたしていて、2人ともかわいくないと思っていたけれど、一人の時間を過ごすことでかわいいと思えた」

4. その他意見

- ・スタッフのやりたいことはいろいろあるが、県の外郭団体として、当センターを施設として抱えているため、本来の当センターの本質に集中できていない。
- ・人員不足。
- ・地域の児童館のバックアップが大切ではないかと思う。当施設だけの評価では全体像はつかめないのではないだろうか。

5. 調査を通して気づいたこと

- ・大型児童館であるためいわゆるインテークがない
- ・インテークがないかわりにプログラムでの出会いを大切にしている（前の週のプログラムで一緒に遊んだ乳幼児さんが児童厚生員を覚えており、また遊んで！というように遊びに誘っていた）
- ・仙田満設計の斜塔と二重らせんを特徴とする「チャレンジタワー」は子どもに大人気であり、遠足に来ていた小学生たちがひたすら走り回っていた。
- ・体験の床など、館全体が子どもが動きたくなる構造をしており、登ったり、降りたり、隠れたり身体全部を使って遊んでいた。
- ・隣接する県からも遊びに来る親子がいる。特に、土日に来る場合は父親も一緒のことが多いので、父親を巻き込めるようなプログラムを考えている。
- ・小型児童館ではなく大型児童館だからこそできる来館者への関わりがある。地元ではないからこそ気楽に利用でき、周囲を気にせず相談ができることもある。一期一会に近い関わりだからこそその良さもある。近所にある地域の児童館だと帰った後も常に話題を引きずってしまう。この背景にあるのは職員の対応である。絶対的にママの味方というスタンスでの職員さんの関わり、細かい背景は分からないこそ優しい声掛けができる。少しでも来てよかったと思ってもらえるように対応している。
- ・愛知県児童総合センターは場所柄、小学生が1人で来館するようなことは少ない。保護者と来る子どもたちばかりであるため、「あんな姿見たことなかった」と大人が子どもを新たに発見する場づくりを意識してプログラムを組んでいる。大人の上手い下手という評価につながらないものを作ること、大人が楽しそうだと子どもはうれしくなるからこ

そ大人にもプログラムに参加してもらうことを意識している。

Ⅲ. 考察

遊びを通した親子の観察や、その変化のエピソード、遊びを通した子どものとらえ方の変容は多々あるが、それが評価に組み込めていない。

愛知県児童総合センターは、「子どもたちが健全に発育するためには、あそびが重要な役割を担う」を、基本理念として、大型児童館の固有性を十分に活かした活動を展開している。児童厚生員の遊びに関する高い専門性を背景として、不特定多数の人々が来館する中で地域の小型館ではカバーしきれない福祉的課題にも対応している。遊びを通した親子のかかわり方の観察や、その変化のエピソードは多々ある。遊びのプログラムを通して、親の子どものとらえ方が変化した例も少なくない。ところが、それらを評価に十分に組み込めていない現状もある。

「あのねっとクラブ」は連続5回のプログラムである。プログラムでは、子どもと遊んだ後、お母さんだけで話す機会を設けているが、普段から親子は評価のまなざしにさらされており、最初から悩みを口に出せるわけではない。そこで児童厚生員は、保護者の話を否定せず聴き、「親をほぐす言葉かけ」を心掛けている。そうすることで、地域の児童館など近所の繋がりがある場所では話しにくいことや悩みがだんだん出てくる。特に、連続講座のなかで「パパのクッキングタイム+ママのジブンジカン」を実施するが、パパと子どもがクッキングをしている間に、ママは自分の時間を取り戻すことができるようである。ある保護者は、このプログラムに参加したことで「上の子と下の子の育児で毎日ばたばたしていて、2人ともかわいくないと思っていたけれど、一人の時間を過ごすことで可愛いと思えた。」と自分自身の子育てを振り返り、子どものとらえ方が変容した。

「あなをほる」は、絵本をモチーフにしたプログラムで2日間ただひたすらあなをほる。担当の児童厚生員は、当初「子どもがあなをほるのに飽きてしまうのではないかと懸念し、たくさんのおもちゃをひそかに準備していた。ところが、子どもたちはまったく飽きずひたすらあなを掘り続けたため、おもちゃは全く必要なかったという。このような子どもの姿からプログラムを改善する試みはすでに実施されているが、これは子どもを観察し、児童厚生員のとらえ方が変容した例であろう。

また、忘れてはならないのが建物である。仙田満設計の斜塔と二重らせんを特徴とする「チャレンジタワー」は子どもに大人気であり、遠足に来ていた小学生たちがひたすら走り回っていた。また、体験の床など、館全体が、子どもが動きたくなる構造をしており、登ったり、降りたり、隠れたり身体全部を使って遊んでいた。このように自然と子どもが身体を動かしたくなる構造は、児童館が「館」であることの特性を十分に活用したものである。一緒に来た親が、これまで見たことのない子どもの一面を見て驚くこともしばしばだという。

上記のように、児童館での活動を通して大人の側の子どものとらえ方が変化するエピソード

ードは多く耳にした。その契機となっているのは、児童厚生員の子どもや親への働きかけや児童館の「館」の特性によるものであるが、どのような働きかけが重要か、どのような「館」の要素が子どもの自然な動きを促すのか、職員同士で共通理念として理解できているように感じられた。

ところが、現状の評価はプログラムへの満足度や来館者数によるものであり、プログラムを通した子どもに対する大人の意識変容や、子どもと親への働きかけに関する理念の共有、「館」の特性については、評価に十分組み込まれていない。児童館での活動を通して、子どもが遊びに熱中することはもちろん、親が「子どもってかわいいな」「子どもってたいしたものだな」と気づくこと、児童厚生員が自分自身の支援行為を捉え直すことは、子どもの健全育成ひいては子どももの最善の利益につながる重要な要素であり、一連の大人の変化を可視化するような評価の枠組みが必要である。

